2016

友引町内会通信

Vol.193

3

毎年よ彼岸の入りに寒いのは　　正岡子規

明治 26 年春のお彼岸、子規はお母さんに向かってつぶやきます、「彼岸というのに、寒いね」。彼女の返事は、「毎年よ、彼岸の入りに寒いのは」。口語体俳句の基本形といわれる名句はこうして生まれたとか。子規は、春の彼岸を迎える度に母を偲び、供養の手向けを欠かさなかったそうです。

普段着のわたしたち

法然上人像（フィギュア）があります。

海洋堂という会社から法然上人八百回忌の記念に発売されたものです。

征阿

２月某日、岐阜県土岐市の酒蔵の「蔵開き」に出かけました。ご覧のラインナップ。

好きなだけお飲み！というシステムです。友人と２人、大いに試飲（という言葉は適切でないかも）いたしました。しかし、土岐の山奥の酒蔵は寒い！　いくら飲んでも寒のせいでちっとも酔いが回らない～。故に更に飲む・・・という悪循環いや好循環。

訶梨帝母

昨年の夏は雨が少なかったからか、立木が何本も枯れてしまいました。その後始末が大変です。ノコギリでせっせと切って細かくしてゴミに出しています。身体のあちこちが痛みます。

幽思房

毎年年末に地元のタクシー会社数社から貰う日めくりカレンダー。悪いけれど、どれも使用せず捨てています。ごめんなさい。それに比べ、写真の「金印わさび」さんの日めくりは粋でしょ！　蕎麦屋に掛けてあります。蕎麦屋はわさびを使うから。英数字ではなく漢数字。書体は勘亭流。こうでなくちゃね。おばちゃんに聞いたら、金印さんのオンラインショップで購入できるそうですよ。

俊徳丸

２月３日、今年の恵方【南南東】に向かって恵方巻きをいただきました。これで１年間、無事に過ごせるぞ！という安心感と幸福感を得ることができました。「科学的根拠」は全くありませんが・・・（苦笑）

露の身

欄間の陰にスピーカー。本堂はお経の声が美しく響くような構造です（そう称すれば）。より心地よい法要をと思い、自然音のBGM を流してみました。春は鳥のさえずり、夏は高原の朝、秋は虫のシンフォニー。でも冬が見つかりません。飄々たる風の音では、余計に寒くなるし・・・。

迷走坊

春です。新しい風を…

テレビ朝日で放映されている、お坊さんバラエティー『ぶっちゃけ寺』を楽しみにしています。10 名程の各宗派の僧侶が佛教知識をわかりやすく紹介しています。この番組を安心して気持ち良く見ることができるのは、MCを「爆笑問題」がしている効果の他に、出演している僧侶が「我が宗では、〇〇〇です」と言わないことです。全員が同じ方向を見ていることを感じます。「宗論はどちらが負けても釈迦の恥」…、古典落語に出てきますが、なかなか「真」を突いた文句だと思います。

このように教義論争などしない代わりに、私は他宗の僧侶方と交流が少ないですし、知らないことばかりです。迷走坊さんが誘って下さって、ある行事で関市の黄檗宗（禅宗）のお寺へ行くことがありました。黄檗宗というと、私の知識では、京都宇治市の大本山萬福寺の「普茶料理」、江戸時代初期（1654 年）に隠元和尚が中国から来日された折、「インゲン豆」を伝えられたということぐらいでしょうか。当日、そこの住職さんがお称えになられた御経を聞いてびっくりです。『般若心経』なら、ご一緒にお称え出来ると思っていたのでなおさらです。

『般若波羅蜜多心経』　観自在菩薩。行深般若波羅蜜多時。照 見五蘊 皆 空　…　揭諦揭諦。波羅揭諦。波羅 僧 揭諦。菩提薩婆訶。

御経が中国語読みなのです。帰宅して試みたのですが、これがなかなか難易度が高くて苦戦しています。興味がある方は YouTube でふりがな付きの映像がありますのでご覧ください。

私にとって黄檗宗は極めて興味深いものとなりました。大本山萬福寺へ行ってみますと、斎堂（食堂）の前に開梆（写真）がぶらさがっています。これは、食事や法要の前に集合の合図

に使われるもので、隠元和尚が中国福建省から来日の際伝えられたという「木魚」の原型です。それどころか、木魚、鐘、太鼓、銅鑼などの多種の楽器を駆使し、リズムを取りながら読経をするスタイルを隠元和尚が初めて日本に紹介されたのです。当時の日本佛教界にとってはかなりのカルチャーショックであったことでしょう。私たちが当たり前に打っている木魚は、江戸時代初期以前はなかったのです。また諸堂をめぐっていると一切畳が無いことに気が付きます。中国式の石畳みです。ですから正座ではなく立って読経します。最後、礼拝の際は円座に座具（布製の敷物）を敷いて行います。また雲水さんたちの食事も中国式で、テーブルと椅子、大皿にもったおかずを各々取り分

けて食事をするというスタイルです。

江戸時代初期、隠元和尚を中国から招き、中国式の建物で萬福寺を建立し、あえて作法等すべてを中国式にこだわった背景には、鎖国時代が始まり数十年、佛教界がマンネリ化しないよう、「新しい風を吹き込む」という意図があったようです。これは『友引町内会通信』の意識するところでもあり、現在の私たちも常に心がけねばならないことだと、肝に免じています。

俊徳丸

『私説法然伝』（１４）

比叡山延暦寺にて②

勢至丸の出家は何時のことか？『法然上人行状絵図』第四段には「久安三年（一一四七年）十一月八日」のことであったとあります。勢至丸の年齢は十五歳。今の世ではまだ中高生の年齢で、まだまだ子供として扱われる年頃でしょうが、当時では大人の仲間入りの年頃となります。

以前にも法然上人の出家・得度の年齢は各伝記共通して十五歳であると書きました。しかし相違点があるのは出家の「原因」となる部分です。この『私説法然伝』で以前に書いたのは「法然上人の父時国が定明という敵に襲撃され、その時の傷が元で時国が絶命することになり、その時の遺言により出家することを決意する」というものでした。これは多くの伝記でそう書かれているものでありますが、実は古い伝記にはその記述がないものがあります。「醍醐本」と呼ばれる法然上人の弟子の勢観坊源智上人の書かれた伝記です。これによりますと父の時国襲撃は無く、叔父の観覚の弟子となっていた法然上人は比叡山延暦寺に登り十五歳の時に出家し、その後父の時国が殺害された、とあるのです。また、西山派の学僧である行観上人は『選択本願念佛集秘鈔』にて法然上人は十歳で観覚の弟子となり、十四歳で比叡山延暦寺の登り十五歳で出家、と記述しています。法然上人の伝記は多岐にわたり、どの説が正しいのかどうかは断言しかねる部分があります。また、その「差異」が法然上人にどのような影響をもたらしたのかについても断言することは不可能だと言えます。ほぼ確定事項として言えるのが、法然上人は十五歳で出家された、ということです。　では、その出家は一体どのようなものであったのでしょうか？

『法然上人行状絵図』によれば勢至丸の出家は久安三年十一月八日のことであったという。剃髪し、戒壇院にて大乗菩薩戒を授けられた、とだけある。その時は皇円阿闍梨の弟子であるとされている。そうであるならば戒師は皇円阿闍梨であろうか？

『法然上人行状絵図』にはその点の記述は無い。出家後すぐに皇円阿闍梨に隠遁することを願い出たとある。皇円阿闍梨はそれを許さず、まずは天台三台部をはじめとする天台教学を学んでからにせよと諌めたと伝えられる。勢至丸は皇円阿闍梨に言われた通り三年かけて天台教学を学んだ。しかし隠遁の志は消えず、名利を追うことを嫌い、久安六年（一一五〇年）九月十二日、十八歳となった勢至丸は西塔黒谷の慈眼房叡空の庵室を訪ねて行くのである。

ここで慈眼房叡空という僧侶が登場します。勢至丸こと法然上人はついに出家されるのですが、それは思っていた通りの僧侶としての生活ではなかったことが伺い知ることができます。以下次号に続く（征阿）

比叡山延暦寺・戒壇院

こもりうた⑭

先月に続き、ご本山の法脈相承（加行）について。

通常加行は、一年ないし二年間ご本山にて随身（学生としておつとめ）したのち、もしくは講習会に数度通い学んだのちに集大成として受けるのが望ましいのですが、無知な私はまっさらで受けに行きました。加行が初本山登山。いろいろ不手際が出るに決まっているのですが、それも後から気づいた事。前回もお話した水行では歴史に残る？大失態を致しました。

行人は白衣をまといお念佛をとなえ一列で進み、水行場前でサッと白衣を脱いで、男性は褌一丁で水をかぶります。女性は白衣の下にお腰を巻き胸にはさらしを巻いています。この過程、機敏で美しい所作と厳粛な雰囲気と一定のリズムがあります。躊躇することは許されません。私は男性と共にサッと潔く白衣を脱ぎ「すわ！」と行場に入りました。すると、一瞬の静寂。変な空気感。偈文と念佛以外の言葉は無い儀式の中で私に向けられる監督の視線。

「これ、白衣着なさい」という小声。

「え？　だってここで白衣は脱ぐんでしょ？」と心でつぶやき、勢いを折られ意気消沈しつつ、疑問符いっぱいの頭で白衣を着、第一回目の水行をしました。

その後すぐに呼ばれ、「女性は白衣を脱ぐな。胸にさらしを巻いただけで頭から水を被ったら水の重みで落ちるだろう。胸を放り出して水行するつもりですか。想像したらわかるでしょう。」と少しも想像しなかったご指摘を受けました。当時三十一歳、相応の覚悟で挑んでいた私も負けません。「水行作法の説明で白衣は脱ぐとお聞きしました。さらしは慎重に巻きました。万が一ズリ落ちてもそのまま行を続けるつもりでした。神聖な行の中で男性がそれに目を呉れる事もない、故に恥ずかしくはないと思ってました。」と返すと、「いや、見るよ普通。説明不足は悪かった。でも、過去に無いよ白衣脱いだ女性・・・」という顛末。間もなく、恥ずかしい思いが湧き、加行のなんたるかを予め心得ていたら起きない失態であり、自分の非であったと反省しました。予習、準備は大切です。大わらわだと心も病んでくるので失礼な発言もしてしまいます。

翌年、ご本山にて監督方にお会いした際、「あなたの例の件があって、女性は白衣を着たまま水を被るように、去年かくかくしかじかと説明を足すようにしました。」とお聞きしました。私の失態も無駄でなかったならば何よりです。

我が息子、まだまだ先ですが加行を受ける際には粗相のないように、しっかり仕込んでから登山させたいと思います。

訶梨帝母

非科学的

◆「三月か・・・もうカレンダー2枚捲ってしまったか・・・」

♠「カレンダーといえば、昨年の暮れに、ある自治体でカレンダー発行の差し止めがあってニュースになったの知ってる？」

◆「知らない。何で発行差し止めになったの？」

♠「そのカレンダーに六曜が記載されていたからだって」

◆「えっ？六曜なんて、どのカレンダーにも載ってるじゃないか？」

♠「私もそう思うんだけど、その自治体が言うのには『六曜とは科学的な根拠に基づかない迷信・因習の一つであり、科学的に証明されない迷信を信じることは、よろしくない』と、いう理由で差し止められたらしいよ」

◆「科学的、科学的って・・・一体何だよ・・・そんなに科学的根拠があったり、科学的に証明できることは素晴らしくて、そうでないことは、いけないことなのかよ！？だいたいよ、迷信迷信って言って科学的根拠が無いって軽んずるが、《貴重な尊い言い伝え》とも言えるし、そういうものが秩序や治安を守ってきた一面もあるんじゃないのか？『嘘をつくと閻魔様に舌を引っこ抜かれる』とかな」

♠「まあ、そんなに熱くなるなよ。この場合は公的機関が発行するということで、停止となったわけだが、私的なものまでいかんと言ってるわけではないだろう。とは言っても、世の中がそういう流れになりつつあり、だんだん窮屈になっていってるような気はするが・・・」

◆「公的機関？だったら、そのうちどこの公営火葬場も『友をあの世に引っ張るなんて科学的根拠がない』って友引も営業するようになるのかな」

♠「そうしたらこの友引町内会通信の名前も変えなくちゃならんか・・・公的機関と言えば、ある公立小学校で、給食前に、合掌して『いただきます！』って言うことが、【宗教的である】という理由で中止になったという話を聞いたことがある」

◆「えっ、じゃあどうやって食べ始めるの？」

♠「先生が『ピーッ』って笛を吹いたら食べ始めるんだってさ」

◆「笑えない話だな・・・戦後、公立学校、公的機関から宗教的なものや非科学的なものを『いかんもんだ！』と排してきたわけだが、そうすることによって学校や社会は良くなったか？子供達は、人間は良くなったのか？そういうものを排してきたのに『何で良くならないんだ？』って首をひねって悩んでいるじゃないかよ！

【科学的根拠が無いことを軽んじて排する】やってることがお隣の国の文化大革命に似てないか？あれをやってあの国良くなったか？」

♠「それが【答え】だな・・・」

（露の身）

十王様とお友だち

前号では、十王様のうち七番目の泰山王（薬師如来）までご紹介しました。今回は、残りの三王様。四十九日までに最終審判が下りない亡者を裁く方々です。

百ヶ日目に平等王（観音菩薩）の審判があります。王は、「自らの存在が風前の灯火、命が無常迅速であることを忘れ、いたずらに時を過ごしたであろう」と亡者を諭します。ここで懺悔し悔い改め、遺族が追善供養すれば良いのですが、聞く耳を持たなければ堕獄の決定が下されます。

まだ結審しない場合は、一周忌に都市王（勢至菩薩）の元へ出頭することに。そこには幾つもの箱があり、「好きなのを選べ」と言われます。（舌切り雀か？）箱の中身が行く先を決めるのです。ここでも、遺族が追善供養に努めれば、悪行を犯した者でも三回忌まで決定が猶予されます。

そして最終的に、五道転輪王（阿弥陀如来）から最終審判を下されるわけです。

亡くなった後までも審判があり、遺族に追善供養を薦めるとは、「なんのかのと、やまこ坊主の考えることは！」と罵倒されそうですが、亡き方をいつまでも忘れずに供養し、極楽往生を願うことは決して悪いことではありません。

十王像と一緒にお祀りされることが多いのが奪衣婆。三途の川（葬頭河）の畔で亡者の衣類を剥ぎ取る婆です。衣類は懸衣翁という爺によって衣領樹の枝に掛けられる。亡者の衣類には生前の業が現れ、その重みによって枝がしなります。そのしなり具合によって、三途の川のどこを渡るかが決められたとされています。

三途の川には三つの渡し場があり、まず善人は金銀七宝で造られた橋を渡れます。罪の浅い者は、山水瀬（浅水瀬）、膝ぐらいの水かさの所を渡ることになります。

一方、罪の重い者は強深瀬（江深瀬）へ。流れは急で波は高く、川上から岩石が流れてきて五体を打ち砕く。水底には大蛇がいて、浮き上がれば夜叉から弓で射られる。

これが室町時代中期になりますと、三途の川に「渡し船」ができます。あの世も近代化するのです。

「奪衣婆失業か？」いえ、渡し賃の六文を持っていない亡者から着物を剥ぎ取ります。棺桶の中に丸を六つ描いた紙を入れてあげるでしょう。六文銭の代わりです。

大河ドラマの真田家の旗印がこの六文銭。戦や日頃の駆け引きでも死を厭わない「不惜身命」の決意で臨むことを表すとか。

この婆ちゃん、江戸時代末期には、疫病よけや咳止め、特に子どもの百日咳に効き目があると信じられ、単独で大事に祀られるようになっていきました。

こうして「地獄の沙汰も金しだい」から「地獄でほとけ」へと変身したわけです。

迷走坊

観経物語（９２）

正宗分（しょうじゅうぶん）その４６
第十観音観（かんのんかん）その１

《本文》

佛、阿難および韋提希に告げられる。

「無量寿佛を見るに、了了して分明し已われば、次ぎには復た当さに観世音菩薩を観るべし。此の菩薩は、身長八十万億那由多由旬なり。身は紫金色にして、頂に肉髻有り。項に円光有り。面は百千由旬なり、その円光の中に、五百の化佛の有ること釈迦牟尼佛の如し。一一の化佛は、五百の化菩薩と、無量の諸天有り。以て侍者と為す。拳身の光の中に五道の衆生、一切の色相皆、中に(於いて)現れる。頂上の毘楞伽摩尼宝を天冠と為す。其の天冠の中には一の立てる化佛有り。高さ二十五由旬なり。

《意味・訳文》

佛は(弟子の)阿難と韋提希(夫人)に告げられた。

「無量寿佛を(観想=観法として心を集中して)見て、はっきりと見定めることが終わったならば、次には復た、観世音菩薩を観想しなさい。この菩薩は、身長が無数の由旬を(さらに)八十万億倍したものに達する。菩薩の身体は紫金(紫色を帯びた黄金)の色彩をしていて、頭の頂上には髻(もとどり=髪の毛を頭の上で束ねたもの)の形をした肉髻(にっけい=肉の隆起)があり、項(きょう・こう=うなじ、首の後ろの方)からは、円い後光が射しており、その後光の縦と横の幅は、それぞれ百千由旬ある。その円い後光の中に、五百人の化佛(=衆生を救うために現れた佛)を持っているのは、釈迦牟尼佛と同じである。その一人一人の佛は、衆生済度の為に現れ五百人の菩薩および無数の天神らを従えて、侍者としている。観世音菩薩の全身から放たれる光の中には、五道すなわち地獄・餓鬼・畜生・人間・天界の五の世界に住む存在としての衆生を始めとして、すべての色や形のあるものの、姿や有り様が出現する。またその頭の頂上には毘楞伽摩尼宝(釈迦毘楞伽摩尼宝=シャク・アラグナ・マニ・ラトナ、良く色々なものを出現射せる摩尼宝珠という意味)を、素晴らしき冠としているのである。その素晴らしき冠の中に、一人の立った化佛がある。高さは二十五由旬である。

※観世音菩薩(古い呼び名)=観自在菩薩(新しい呼び名)とは、智慧をもって観照することによって、自在の力を得た菩薩という意味で、衆生の恐れの心を取り除いて世を救済する、慈悲の働きの菩薩をいう。

《幽思房》